高齢者の絵本の読み聞かせボランティア活動と認知機能

(8) 昔話の語りの発話量と情報量

○大塚紫乃¹・齋藤有²・鈴木宏幸³・佐久間尚子³

(¹江戸川大学・²聖徳大学・³東京都健康長寿医療センター研究所)

キーワード：昔話の語り，高齢者，認知的介入

Volunteer activities of reading picture books and cognitive function in elderly: (8) Speech amount and amount of information in narrative folk tales

Shino OTSUKA¹, Yu SAITO², Hiroyuki SUZUKI³, and Naoko SAKUMA³

(¹Edogawa University, ²Seitoku University, ³Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology)

Key Words: narrative folk tales, older adults, cognitive intervention

目 的

“REPRINTS”研究¹の介入効果が，追跡7年目以降に導入した「桃太郎の語り」「浦島太郎の語り」課題に見られた（齋藤ら2013，菊地ら2013，大塚ら2014）²。読み聞かせボランティアを継続している介入群では，物語の情報を多く語ることができた。また，群による語りの差は，物語の知識のみによって説明されるわけではなく，語りの技術向上が要因となった可能性が示された。

語りの技術向上について説明するためには，情報量以外の側面も考慮する必要がある。今回は，語りの時間や文字数といった発話量に着目し，発話量と情報量の関連が群によって異なるのか，つまり，介入効果が語り方に現れるのかを検討する。

方 法

対象 REPRINTS への継続参加者（介入群）と健診のみの参加者（対照群）を対象とする。基本として7年目に「桃太郎の語り」課題，8年目に「浦島太郎の語り」課題，9年目に「再認」課題を行った。途中抜けの場合は，未実施の課題を10年目に行った。本研究の分析では，語り課題のデータを用いる。語ることができた参加者は，桃太郎の語り197名，浦島太郎の語り121名であった（表1）。

表1 物語ごとの各群の属性

	桃太郎		浦島太郎	
	介入群	対照群	介入群	対照群
N	92	105	50	71
平均年齢	73.6	74.5	75.7	76.3
平均教育年数	13.3	12.4	13.8	12.7

課題 昔話の語り：題名（i.e., 桃太郎／浦島太郎）が書かれたカードを見せ，「このお話を小学校前のお子さんに聞かせるようにお話ください」と教示した。5分程度で語りを終了した。

得点化 基本得点：物語を構成する10場面を抽出し，物語を成り立たせる必要最低限の50個の基本情報を決定した。意味レベルで基本情報と一致する語が語りの中に含まれていた場合に1点を与えた。ただし主述の関係の正しさを考慮し採点した。2名で採点し，不一致は協議して得点を決めた。

周辺得点：基本情報以外の修飾的で周辺の情報を抽出した。語りの中に含まれた周辺情報の数を得点とした。

秒数：語り始めから終わりまでの秒数を計測した。

文字数：語りをひらがな表記にし，文字数を数えた。

結 果

1. 秒数と文字数の群による差

表2に秒数，文字数，得点の平均を示す。桃太郎と浦島太郎の語りの秒数と文字数について，群2（介入・対照）の1要因分散分析を行った。その結果，それぞれ群の主効果が，秒数（ $F(1, 195)=34.39$, $p<.001$; $F(1, 119)=7.44$, $p<.01$ ），文字数（ $F(1, 195)=33.14$, $p<.001$; $F(1, 119)=8.75$, $p<.01$ ）において見られた。介入群の方が対照群よりも長く発話していることが示された。年齢と各点数，秒数，文字数との相関は見られなかった（ $n.s.$ ）。

表2 物語と群ごとの各得点の平均（SD）

	桃太郎			浦島太郎		
	介入群	対照群	全体	介入群	対照群	全体
平均秒数	180.3 (94.0)	114.8 (64.6)	145.4 (86.0)	141.3 (63.9)	105.0 (68.2)	120.0 (68.6)
平均文字数	742.9 (423.8)	437.3 (304.2)	580.1 (394.8)	536.1 (266.5)	383.1 (327.5)	446.3 (311.9)
平均基本得点	38.7 (10.3)	29.5 (11.2)	33.8 (11.7)	31.6 (10.7)	24.2 (11.6)	27.2 (11.8)
平均周辺得点	7.8 (4.2)	5.6 (3.9)	6.6 (4.2)	7.6 (4.0)	4.4 (3.5)	5.7 (4.0)

2. 発話量と情報量の関連

語りの秒数や文字数を発話量，語りの得点を情報量とし，両者の関連を分析した。物語と群ごとにPearsonの相関係数を求めたところ，発話量と情報量の間には高い相関が見られた（ $r=.46-.84$ ）。

群ごとの語りの特徴を明らかにするために，文字数や秒数と語りの得点の分布を調べた。図1と2は桃太郎の語りの文字数と得点との関連を示したものである（浦島太郎の分布図は省略）。

図1より，介入群では基本得点が高く，長く発話できる人が多いことが分かった。基本得点が全体の上位25%（桃太郎では44点以上，浦島太郎では38点以上）に入る人は，介入群の方が多かった（桃太郎は介入群43.5%，対照群6.7%，浦島太郎は介入群34.0%，対照群18.8%）。また，基本得点の上位群の人は，発話の時間も長い傾向にあった（桃太郎：上位群の平均発話秒数=235.7，全体の平均発話秒数=145.4，浦島太郎：上位群の平均発話秒数=186.7，全体の平均発話秒数=120.0）。

図2より，長く発話できる人ほど周辺情報を多く語っていた。図1と2を合わせると，基本得点を50点近く獲得している人ほど，周辺得点が高いことが分かる。そして，このような傾向は介入群において顕著であることが読み取れる。

以上より，介入群では発話量が比較的多く，語りの中に基本的な情報のみではなく，周辺の情報を含めている場合が多いことが示された。一方，対照群では発話量が比較的小さく，基本的な情報が十分でない場合が多いことが示された。

図1 群ごとの桃太郎の語りの基本得点と文字数の分布

図2 群ごとの桃太郎の語りの周辺得点と文字数の分布

考 察

本研究より，読み聞かせボランティアの継続によって，高齢者の昔話の語り方に違いが現れることが示唆された。介入群では，基本的な情報を含めるだけでなく，物語を豊かにするような情報を含めた語りが多かった。対照群では，発話量と情報量ともに比較的小なかつた。長く発話し，物語を豊かに語る能力は，介入群の方が高い可能性が考えられる。今後は，語りの質的な評価をし，語り方と認知的な機能との関連をさらに検討する。

引用文献

- 藤原佳典，他（2006）都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム：“REPRINTS”の1年間の歩みと短期的効果。日本公衆衛生学会誌，53，702-714。/2. 日本心理学会第77,78回大会ポスター発表。謝辞 本研究は厚労科研H16-長寿-031（代表：新開省二），H19 三井住友海上福祉財団（代表：藤原佳典），文科研H22,26 基盤C（代表：佐久間尚子）の研究助成を受けた。共同研究者の皆様へ感謝申し上げます。